

〔研究ノート〕

張風「賞楓図」(大和文華館蔵)と金山従革、桑名鐵城
—北陸における中国書画コレクション形成の様相—

明末清初の南京で活躍した文人画家・張風(?~1662)の作で、ひとりの高士が懸崖の紅葉樹を見やるさまを描く「賞楓図」(図1。大和文華館蔵)は、当館初代館長・矢代幸雄(1890~1975)が、開館にむけて昭和31年(1956)に購入した中国絵画の一つです。本稿では、当館に収蔵される以前の本図の来歴について、文字史料等をもとに考察します。

「賞楓図」は、20世紀前半には、富山の政治家・実業家である金山従革(図2。1864~1936)のもとにありました。立山の素封家に生まれた従革は、立山村長、衆議院議員、立山軽便鉄道(現在の富山地鉄立山線)や立山製紙の創業等といった重役を歴任する一方で、日本東洋の歴史文化、芸術に深い関心をもちました。若き頃に清朝の文人・楊守敬に漢学を、金沢の北方心泉に書を学び、王治本や呉昌碩といった清末民初の文人とも交流、書家・篆刻家としても知られました。号を七十二峰山人、越岳、怪堂などとし、別宅「寄

枕野堂」に膨大な東洋古美術を収集、それらは現在散逸しましたが、逝去の翌年(昭和12年[1937])に行われた売り立ての目録『越山山莊藏品目録』に、その充実した藏品の一端を窺うことができます。

従革は、「賞楓図」を含む中国書画をどのように入手していたのでしょうか。「賞楓図」には、節堂なる人物が、京都の篆刻家・桑名鐵城(1864~1938)に宛てた葉書(明治36年[1903]4月6日消印)が付属品として残されており、文面は以下の通りです。「おしきもの奈可らふたつよい事^{なほよく}ない。張大風差上可申候。郭詡御持参可被候。今日ハ張大風留別の為、壁間ニ懸ケ熟親致居候也。四月六日。節堂。」(句読点と読み仮名は筆者による)。節堂については不詳ですが、「賞楓図」画面右下に捺される蔵印「節堂」(朱文楕円印)(図3)の主、つまり本図のかつての所蔵者とみられます。葉書の中では、ふたつと無き名品である本図を郭詡(明代の画家)の作品と交換するが、甚だ惜しいので、譲る前に本図を壁に掛けてじっくり見たい、といった旨が述べられているようです。宛先人である桑名鐵城は、渡清の際に数多くの書画を入手して日本にもたらし、今の日本における中国書画コレクションの礎の一つを築いた重要な人物として、今日では知られます。実

はこの鐵城と従革の間には、きわめて深い縁があります。両者とも富山出身で、若い頃に印の行商をしていた鐵城を見だし、師であった北方心泉に紹介したのが他ならぬ従革であり、以後鐵城は、日中で篆刻家としての高い名声を得ていくのです。鐵城が従革のために造った印章も多数伝わり、長年の両者の交友が偲べれます。更に鐵城が従革の使いで中国へ書画骨董の仕入れに行っているという、明治35年(1902)頃の心泉の言も伝わり、従革のコレクションを充実させるうえで、鐵城が非常に大きな役割を果たしたことが窺えます。剣持翔伍氏のご教示によれば、従革旧蔵である清の顧大申「松磯独釣図」(東京国立博物館蔵)は、鐵城が箱書を書きしており、これも鐵城を経由し入手した作とみられます。この他にも『越山山莊藏品目録』所収の中国書画は明清のものが多数を占めており、当時日本の主流であった宋元画ではなく、あまり評価されていなかった明清画に注目していた鐵城の関与が想定されます。そして興味関心と同じくする従革の収集方針のもと、「賞楓図」は従革の所蔵となったとみられます。なお「賞楓図」は明治37年(1904)刊『南宗名画苑』(第17号、審美書院)には従革の藏品として紹介されており、節堂から鐵城に渡って間もなく従革のもとに

入ったとわかります。鐵城の旧藏品の多くに捺される蔵印が、本図には一顆も認められないため、もともと従革の所蔵となる予定で、鐵城はあくまで仲介だった可能性も考えられます。ただ鐵城は、大正4年(1915)に本図に倣うとみられる「傲清人山水図」(泉屋博古館蔵)を制作しており、以後も折に触れて見る機会があったのかもしれませんが。

本図は『南宗名画苑』以後も、『東洋美術大観』(第11巻、明治41年[1908]、審美書院)などの図版入りの画集や目録で紹介され、金山家の名宝、また日本に所蔵される清画の佳作として知られたようです。本図の画題は、20世紀に幾度かの変遷を経ています。前述の『南宗名画苑』では「空壑高士図」、「東洋美術大観」『越山山莊藏品目録』等では「観楓図」として紹介されており、現在の「賞楓図」は、当館購入時の台帳の記載に従います。この画題の由来として、現在の本図の外箱・内箱の墨書「張風賞楓」(図4。〔右〕外箱〔左〕内箱)が考えられます。筆者は不明ですが、やや線に強弱ある篆書は、従革の書風(図5。「風流報国不論銭」一行書)に近いと思われます。この箱書が従革であれば、題名も従革による可能性があります。従革は、画中の高士の姿に、紅葉を慕う想いを感じ取り、それをこそ画題にすべきと考えたのでしょうか。

日本近代の中国書画収集をめぐる各地のネットワークは、今後も精査していくべき重要な課題といえます。

(都甲さやか)

※図2は「立山町史」下巻、立山町、1984年。図5は『越山山莊藏品目録』、1937年、東京美術印刷社より転載しました。

※本稿では、関西中国書画コレクション研究会員の皆様より多くのご教示を賜りました。ここに記し、深く感謝申し上げます。



図1



図2



図3



図4

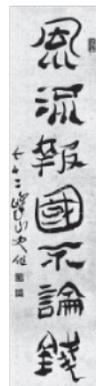


図5

季刊 美のたより No.229

令和7年 1月 31日

発行 大和文華館